
きっとそれは嘘だから（仮題）

ぴざぽてと2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつとそれは嘘だから（仮題）

【Nコード】

N8702X

【作者名】

びぞぼてと2号

【あらすじ】

鬼畜シヨタがハーレムを作るよ！

流行りらしいから異世界転生させるよ！

というぽつと出のネタで書く、不純&見切り発車な初投稿です。下ネタ分が多くなると思われますので、そういうものが苦手な方はそつと戻っていただけるとありがたいです。

この作品はフィクションです。作品内に登場する名前、国名、地名等々は実在のものとなんの関わりもありません。

なお、更新が止まった際は「作者が羞恥に耐えられなくなった」と思ってください。

いつの間にか死んでいた平坂薫が、リュカ・L・グレーネスとして転生したとき、最初に考えたのは「この性欲をどうしようか」というひどく下卑たものだった。

生まれたばかりの彼は、年若い乳母に抱きしめられていたが、その胸が当たっているのだ。精神的には24才の一般的な成人男性の彼とすれば、これは拷問だ。

目の前に魅力的な双丘があるにもかかわらず、赤ちゃんなので触ることができない。普通のサラリーマンとして働いていた頃なら、性的に興奮すれば発生していた生理現象も起きない。

リュカは自分の股間を恨めしげに睨んだ。それはどうやら乳母には赤ん坊がぐずっていると見えたようで、よしよしとあやされる。

その拍子に、より強く押し当てられる胸。

これからそれこそ十年位、こういう生殺しの状況が続くわけか……。自分で慰めることもできず。耐えられるかね？

出た答えは強い否定。

彼は自分があまり人として上等な人物でないと思っていた。

権力を握れば増長し、金を持って増長する、そういう人間である、と。

そして、彼は自分のそんな性分を変える気がなかった。だから彼はほくそ笑む。

前世での知識を使えば、うまくやれる。それこそ、ハーレムと
かも作れるかな。

転生してすぐに、グレーネス家は裕福な家のようにだと気づいた。

リュカには専門のメイドが何人もつき、毎日朝から晩までつきつきりで世話をされる。まだあまり動けないために周りの様子をうかがい知ることが難しいが、それでもリュカの住む部屋が非常に広く、調度品も格調高いものだと分かった。

好都合だ。金があれば、多少の無理は通る。

リュカは金に物言わせて弱者を虐げる自分を想像してすこし笑った。

そんなリュカを見たメイドの一人が微笑んだ。どうやらリュカがほくそ笑むさまははたから見ると赤ん坊がキャツキャと無邪気に笑っているようにみえるらしい。

「リュカ様、

。、。

」

メイドがなにか言っていてリュカを抱きあげる。リュカ様しか聞き取れなかったが、言語の違いは仕方ない。

言語どころか、世界が違う。前の「平坂として生きてきた世界」には、このメイドのように耳の尖った浅黒い肌の種族は存在しなかったのだから。

「

」

彼女は大切そうにリュカを抱き寄せると、メイド服の前をはだけて乳房をあらわにした。

リュカは彼女の形のいい乳房を口に含み、母乳を飲む。赤ん坊としては至極まっとうな行為にも関わらず、精神年齢24のリュカとしては釈然としない。

まあ、仕方ないか。

体が弱くては、出来ることもできない。そう割り切ることにしたリュカだった。そういうことができるようになるまで、時間は嫌というほどある。

それまで、何か別のことにうちこむのも悪くはないかもしれない。

授乳をされたまま、リュカは今日何度目ともしれない眠りに落ちた。

世の中でうまく立ち回るために、情報収集はかせない。

そんな信条と、ハーレムを作りあげるまでの手慰みを探すために、リユカは言語の分からないなりにメイドたちの世間話に耳を傾けた。

最初こそ自分の名前であるリユカ位しかわからなかったものの、二日、三日、一週間、そして一ヶ月と聞いているうちに、だんだんと彼女たちの会話を理解できるようになってきた。時間はたっぷりあったので一ヶ月ただ耳を済ますだけの生活も苦痛ではなかった。

メイド達の会話が正しければ、リユカの家、グレーネス家はこの世界のレティリシア王国という国の、ロークフィード地方を治める伯爵家のようだ。

レティリシア王国がどの大陸に位置する、などの情報は得られなかった。そもそも、異世界なのだからそういった概念がないのかもしれないなかった。

父の名前は、ラファラン。母の名前はアデライト。三才年上の兄、ジルがあり、全員が色素の薄い肌、金髪、そして灰色の目をしているらしい。メイドの一人はリユカの家族のことを天使一族と呼んでいた。美形の多い一族らしい。

僕が薫だったときの世界での、フランス人名ばかり……。

何か共通点でもあるのだろうか。ただ、あったとしてもそれがリユカの「目的」にプラスになるとは思えなかったので「これはそう

いつものものだ」と納得させた。

リュカにとって大事なものは、自分が美形の多い、特権階級の家に生まれたということのみだ。

まるでそうしろと言わんばかりにお膳立てしてくれるじゃないか。

おまけに、伯爵としての責務を背負わなくてはならない長男ではなく、ある程度自由の利く次男。リュカにしてみれば欲を言えば三男が良かったのだが、そこまでの贅沢は言わないことにした。

文明レベルは、メイド達の会話を聞かなくても分かる。壁に立てられた蝋燭や、壁の彫刻から、中世ヨーロッパが近いだろうか。これも好都合だった。

あまり発達しすぎていても、その逆でも、ハーレムは作りにくいだろうし。

一つ驚いたことは、この世界には魔法が実在するらしい、ということだった。夜になると蝋燭がひとりでにつき、メイドが何か唱えるとミルクが人肌にまで温められる。そんな光景をリュカは何度か見た。

催眠だとか、拘束だとか、そういった魔法もあるのかな？ あんなら覚えておいて損はないよね。

そんなことをリュカが考えながらメイドたちが働いているのを見ていると、転生して最初に見た人であり乳をくれた人でもあるダークエルフのマイラが気づき、坊っちゃんはどうしたのかと首をかし

げた。

一瞬見透かされたように感じたものの、リュカは慌てず可愛らしい笑顔を返し、マイラの乳をせがむ。とっさに乳をせがんだのは、お腹がすいているのも確かにあったが、ほかの理由が大きかった。

「坊っちゃん。またですか？」

困ったように言いながらも、仕事だからか抵抗なく服をはだけるマイラ。健康的な黒い肌と銀色の透き通るような髪のコントラストに息を飲んだ。

「そんなにあげてると娘さんにあげるぶんがなくなっちゃうんじゃないですか？」

まだここに務めて日の浅いメイドが苦笑いをする。そう、母乳が出ることから良く考えれば当たり前なのだが、マイラには娘がいた。リュカより年は一つ上らしい。

マイラはリュカのハーレム計画のトップに名を連ねていたので、彼女が人妻だと知ったときは、美人な彼女を射止めた男を恨んだり嫉妬したが、今はもうそういう感情はない。

マイラの乳に吸い付きながら、リュカは喋ろうとしてみる。

「あら、どうしたの？」

結局はぶーとしか言えず、マイラが慈愛に満ちた顔で見つめてくる。リュカは相手に伝わらないことをいいことに、無邪気な笑顔で言う。

「親子丼が食べたいな、と言っただんですよ」

3 (後書き)

3 話目の時点で作者の羞恥耐性はもう……

親子丼に深い意味はありません

そういつことにしておいてくださいますか

会話を聞き取れるようになって、リュカは自分が失敗していたことに気づいた

メイド達の間で、「ぼっちゃまは泣いたことがない」と言われてしまっていたのだ。気味悪がられてはいなかったのが幸いだったが、なるべく目立ちたくないリュカにしてみれば、これは失敗だった。

リュカは機が熟すまで目立ちたくないのだ。たとえば、前世での知識を使えば簡単に富と名声が手に入るとしても。

もし、リュカが何も持っていない家庭に生まれたなら話が違ったかもしれないが、リュカは幸運にも伯爵家というある程度富も名声も転がり込んでくる家に生まれた。なら、焦る必要はない、と考えていた。

リュカは自分の知識を使えば、この世界の構造をひっくり返すことも可能だと思っている。だが、それまでだとも。世界を変えられなくても、美人とイチヤイチャできなければ意味がない。

翌日から、リュカは赤ん坊らしく振舞うようになり、メイド達の間で泣いたことがない、という話は出なくなった。

マイラに抱きかかえられてあやされるのは気持ちよかったが、それ以上に恥ずかしかったが。

この羞恥に耐えられるだろうか……。

排泄すらメイド達に見られてしまう状況に、さすがに不安になる。何年後か先、教育機関に通うのも不安の種だった。勉強のできる、できないではなく、同級生とまともに会話できるのか、という点で相手は自分を同格と見るだろう。しかし、精神年齢で言えば何回りも上なのだ。

少しばかり憂鬱になるリュカだった。

六年後、リュカの不安は的中した。

4 (後書き)

この羞恥に耐えられるだろうか……。
by 作者

「ただいま帰りました！」

グレーネス家の屋敷に、ダークエルフの、小さい女の子の声が響きわたった。

そろそろ帰ってくるだろうと玄関で待っていたメイド達が一斉に頭を下げる。

「お帰りなさいませ」

リュカは元気よく挨拶した女の子の後ろに隠れるようにしつつ、小さく「ただいま」と返した。

「リュカ君、もっとハキハキしてください」

途端に女の子にたしなめられ、しゅんとなる。

女の子の名前はクリスティアナ。マイラの娘で、母親同様、褐色の肌に長い銀髪を持つ少女だ。おそらく、十年後には絶世の美女として名を馳せるだろう。もちろんリュカのハーレム名簿に候補として載っている。

「強要はいけませんよ、クリス。リュカ様はおとなしい性格でらっしゃるのですから」

今度はマイラがクリスをたしなめる。マイラの存在に気づいて、リュカはマイラに抱きついた。あらあら、とメイド達が微笑む。

ちょうど会食に出かけるところだったリュカの両親も微笑ましくそれを見ていた。母親、アデライトが呟く。

「これじゃあ、どちらが母親か分からないわね」

「仕方がないさ。これも貴族に生まれたものの宿命だよ」

父親、ラファランがそんなアデライトを慰める。ラファランは背の高い、いかにも有能そうな渋い色男であり、アデライトは小柄でどこか儂げな印象のある美女である。

そしてどうやら、リュカは母親の血を色濃くついだらしく、同年代の子供と比べると小柄で、よく女の子に間違えられる。ちなみに、兄であるジルは父に似ている。

「それじゃ、行ってくるからな。クリス、今日もリュカと遊んでやってくれ」

ラファランがクリスにそう言い残し、二人は家の前に止まっていた馬車で出かけていった。メイド達とクリスが行ってらっしゃいませ、と一礼する。

「じゃ、リュカ君。部屋で遊ぼっか」

馬車が見えなくなると、クリスがリュカの手を引っ張ってリュカの部屋に連れていく。彼女は、両親が普段構ってやれないリュカがかわいそうだ、と遊び相手として任命されている。メイドとしての仕事が忙しく、夫も仕事で忙しいマイラが安心して仕事ができるように、という両親なりの配慮も多分に含まれている。

だから、遊び道具などもたくさんある。部屋の中にある遊具を見回して、クリスがリュカに聞いた。

「何で遊ぶ？」

「僕はなんでもいいよ」

大人しくリュカはクリスに従うつもりだった。

一日が終わり、ようやくリュカは一人きりになれた。思わずため息をつく。おとなしい外向きの顔をやめ、苦々しく舌打ちしてベッドに倒れ込んだ。気弱で頼りなく、女男とからかわれて涙目になる普通のリュカを見ている周りの人には想像できない姿だ。

同級生とまともに会話で来るか不安に感じてから早八年。結論として、リュカの不安は的中した。いわゆる前世での幼稚園、そして小学校に通い、今は小学三年生にあたる学年にいるが、正直苦痛となっている。

簡単すぎる授業内容、低レベルなことで盛り上がる同級生達、当然のことながら、リュカと話す際子供と話すように喋る大人達。それらはリュカをイライラさせた。

そのたびに、リュカの歪んだ欲望は膨張していく。

唯一、幼馴染であるクリスが純粹で汚れを知らない少女だというのが救いだった。おまけに、本人に自覚はないだろうが、リュカに

淡い恋心を抱いているのを知っている。そもそも、リュカがそんなように仕向けたのだ。いくら立派な両親に教育されたとはいえ、彼女はまだ幼すぎた。リュカがその心を掴むのにさほど時間は掛からなかった。

ただ、彼女を汚すのはリュカの肉体的にまだ無理だ。いつかそうする日を希望に、明日も頑張ろう、とリュカは深い眠りに落ちていった。

自分が人から見ても「カッコイイ」ではなく、「カワイイ」と思われる人間だと知ってから、リュカはおとなしい人間を演じている。

そのほうが女性からの受けがいいのだ。主に年上の。

メイド達には一部の貴族がしているような尊大な振る舞いはせず、何かしてもらったらず必ずお礼を言うようにして、両親の言うことには従順に従い、兄を慕い、クリステリアナを本当の姉のように好んでいる。両親の教育方針によって入れられた身分の違いによる差別をしない学校では商人や農民の息子、娘と分け隔てなく学び、遊び、「さすが、伯爵様の息子さんはそこの貴族とは違うね」と噂されてはにかむように笑う。

全て、人に好かれるようにリュカが演じている表向きの顔だ。本当の自分がもつと下衆なものであると知っているリュカは、人が自分を褒めているのを聞くと笑い出しそうになるのを必死にこらえなくてはならなくなる。

その笑顔を人は恥ずかしがっている、と取るらしい。

まあ、好都合だからいいんだけど。

リュカとすれば利用しない手はない。リュカは良く笑うように努めた。それでも、周りのレベルに合わせるのがたバカバカしくなつて笑えないことがあったが、幸いにも周囲の人間には気づかれていないようだった。

熱いお風呂につかってるようなものだね。

リュカはそう考えている。周囲の人にとってはまだ熱すぎて、入っていられるのは前世でこの熱さを経験しているリュカだけだが、そのうち周囲も成長していき、熱い風呂につかれるようになる。そのとき、リュカが同じ風呂につかっているようでは駄目なのだ。より熱い風呂に入れるようになっていなければ、転生というアドバンテージを潰すことになる。

それだけは避けたいな。ただ、子供だけのコミュニティだとうしてもまともな情報交換、勉強はできないんだよね。

そんな考えから、リュカは父親、ラファランに一つお願いをした。

伯爵として仕事をする父の仕事ぶりを見たい、と。

ラファランは邪魔だけはしないように、としかつめらしく言ったが、後で母親に「親として初めてあの子に頼られたぞ！」と喜色満面で報告していた、とメイド達の会話から盗み聞いている。

その日から、父が領民の陳情を聞くときや、客人とラファランが会食をしているときに、リュカはこっそりその様子をうかがい知ることができるようになった。

さすがに本当に見せられないものもあるようで、そういうものはさりげなく見られないようにされていたが、それでも十分勉強になった。

リュカにとって計算外だったのは、父の仕事している姿を見られるようになったのがリュカだけでなく、兄のジルと、メイド見習い

兼遊び相手のクリスもそうだったことだった。兄のジルは弟であるリュカが父の背中を見るようになれば必然的に同じ方向を向くのはまだわかるが、クリスがそこに参加するのがなんとも不思議だった。リュカはクリスが父親とマイラの間に出来た子供なのでは、とも思っただが、だったら余計にこんな疑われるようなことはしないと気づいて、訳が分からなくなった。

結局、お目付け役なのだろうとリュカは結論づける。ラファランの仕事を見るようになってすぐ、誰が始めようと言ったわけでもなく、ラファランの仕事ぶりを見ては三人で感想を言いあうのが常となっていた。

リュカは全部の情報を好き嫌いなく客観的に、しかし子供っぽく感想を言うようにしていたが、ジルもクリスも好きな分野、嫌いな分野があるようで、喋ることに偏りがあった。

ジルは「北方で流行病が発生していること」や「今まで治せないと言われていた新薬の開発」といった話を熱心に喋り、クリスは「誰も素顔を知らない凄腕の傭兵」や「騎乗での二刀流ならぬ二槍流の有用性」といった話を好んで喋った。

リュカでなくとも、二人が将来何になりたいか分かる。しかし、二人とも幼いながらに自分の立場を理解している。伯爵家長男が町医者にはなれないし、メイドの娘が騎士になることもできないのがこの世界の理だった。

それをどうこうする気はない。この世界の言葉に、こんなものがある。

「貴族の家には貴族が生まれ、商人の家には商人が生まれ、農民の

家には農民が生まれる。ただ、奴隷だけはどの家からも生まれる「

それがたとえどんなに理不尽だったとしても、まかり通っているならリユカはそれを利用する気だった。

6 (後書き)

今回色々なことを詰め込んだので話がぐっちゃぐちゃに……すみません。

シモネタが少ないぶん作者としては楽ですけど。

こゝこの6話に伏線なんてないんだからねっ！

リュカは一度、父親に奴隷のことについて聞いてみたことがある。ラファランは苦い顔をして、奴隷のおよそ一割はなんらかの罪を犯した人間がその代償として奴隷の身分に落とされているのだと教えてくれた。そして、残りの九割は北方から連れてこられた罪のない人々だとも。

ラファランの口調は重々しく、奴隷制度を良く思っていないのははっきりと見て取れた。

確かに、奴隷制度は良くないことだ。それはわかる。が、ハーレムを作るうとしているリュカにとっては都合がいい。

ラファランはそこで話をやめてしまったのでそれ以上の情報は得られなかったが、リュカはいつか奴隷を買おうと、秘密裏にお金を貯めている。

そのお金が十分に貯まる頃、自分の男としての機能が成熟しているだろうとリュカは考えていた。そして、その予測は当たった。しかし、予想外の事態も起きた。

奴隷を買おうと決めてから二年後には精通が起き、そこからさらに四年。リュカは十四歳になった。もし精神年齢も成長しているとすると、精神的には既に四十近いことになるが、最近の若いもんは、などとオヤジ臭いことを考えたことはないので大丈夫だと思っ

ている。

ちなみに、なゼリユカが四年待ったかと言えば、世間体である。貴族だからある程度は許されても、度が過ぎてはダメだと分かったからだ。

やれるようになった直後、迷い込んだふりをして娼館街に行き、そこで年下趣味の娼婦　ボブカットの栗毛が綺麗で、均整のとれた肢体の獣人だった　で初めてを済ましたことが父親にばれ、こつぴどく貴族としての心構えを説かれて分かったからだ。

十四歳でも、前世であれば十分マズイ年齢ではあるのだが、こちらの世界でならギリギリ大丈夫だ。産めよ増やせよの世界だからだ。子供も立派な労働力である。貧しい地域では、冬の間の食料になつたりするという話もあり、ぞつとしない話だ、とリユカは改めて裕福な家庭に転生したことを感謝した。最悪、意識のあるままにも抵抗できず食料にされた可能性もある。

なんににせよ、もう十四である。ラファランが息子が非行に走らないよう目を光らせているとしても、世間は一応リユカの行動を見逃してくれる年齢である。

自分が床上手であるのは、四年前に確認済みだ。

奴隷を買えるだけのお金も貯まった。

母親同様、背の高い美人に育ったクリスに、リユカをこんにちまで好きでいるようにコントロールすることも成功した。

学校でも何人かの心を掴んだ自信があった。

怖いくらいうまくいったな。

リュカの計画は当初の予定通り進んでいた。彼の容姿以外。

いまだに150センチに届かない身長。授業で大人用の木剣が振れない華奢な体。白い肌と大きな灰色の瞳、癖のある金髪さえも、リュカを子供っぽく見せていた。

これじゃ、人を組敷くことができないじゃないか。

ようするに、リュカは犯罪行為がしづらい体に育ったことが嫌なのであった。どちらかと言えば、身長は190センチを越え、重たい戦斧を軽々と振り回す兄のジルのような体に育ちたかっと思っていた。

本当は医者になる勉強がしたい彼とすれば、父親のつてで王家直属の騎士団へ入れられる遠因となった屈強な体は邪魔でしかないだろうが。

兄弟で体が逆だったらよかつたのに。さすがにそこまで贅沢を言ったらばちが当たる……か。

この体のおかげで女性に警戒心を与えないし、四年前と同じ手口が使える。そうポジティブに考え、リュカは貧しい農民の子供に変装し、夜中、伯爵家の屋敷を抜け出して娼館街へ向かった。

しかし、リュカはこの日、一人として女性を抱くことなく慌てて屋敷へ帰ることとなる。

娼館街に赴き、リュカはすぐに以前来たときと様変わりしていることに気づいた。以前は下品な活気に満ちていたのに、現在は人影もまばらで、明らかに静かになってしまっている。

これはどうということかと、近くの飲食店で軽くお腹を満たしながら周りの会話に耳を傾けた。その話を要約すれば、こういうことだった。

まず、北方から帰ってきて、いざ娼婦を抱きに娼館街に来た奴隷商人が重い病にかかり死んだ。次に、奴隷商人と関わりのある娼婦が同じ症状で死に、死体を片付けた奴隷商人の仲間も死んだ。これは呪術かなにかだ、と奴隷商人の買い付けてきた奴隷を調べると、奴隷達も多くがこの病に苦しんでいることが分かった。

そして街では自粛ムード、と。要するに北方で流行っていた病にかかった男が祖国へ帰ってきて発症したつてのが実際のところなんだろうと思うけど……。なんでこの世界の人達はそこから「奴隷達が自らを犠牲にして奴隷商人を呪ったのだ」と考えるのかな。

北方の人々を蛮族として扱っているくせに、心のどこかで後ろめたいものを感じているから余計にそうやって攻撃的になる。奴隷をかう気である自分のことは棚に上げて、リュカはそういう考え方ができない人間を見下していた。

だから屋敷へとんぼ返りしたリュカはここを治めている父親に報告するより先に、メイド達やコック達に「なにをするにしても、手を洗い、うがいをする事。屋敷の中にあるものはまずそれが清潔

であることを確認してから使うこと」を厳命した。

前世では当たり前な衛生管理も、ウイルスや細菌の存在を大多数が知らず、何か病が起きれば呪術と考える人の多いこの世界では進みすぎていく感のあるこの命令にも、メイド、コック達は黙って従った。リユカは優秀な人間を登用した父に感謝した。もちろん、なぜそんな知識を持っているのか怪しまれないように、「この間、父と会食したさる高名な学者の言っていたことだ」と嘘の情報を付け足すことを忘れなかった。

社交界デビューも果たし、兄のかわりに半ば父の秘書じみたことをしているリユカなので、この嘘はリユカにとって疑いを晴らすと同時に信憑性を高める都合のいいセリフだった。その分、あまり使いたくなかったのだが。下手をすれば自分が死ぬかもしれないという状況では仕方ない。

この対処がどれだけ功を奏すか分からなかったが、メイド、コック達がリユカの命令を素直に聞いたことを確認してから、リユカは仕事上の父に話をしにいった。

「お父さん、お話があります」

仕事を終えてパイプをくゆらせていたラファランは、リユカが突然自室に来たことにあんのじょう驚いた。普段、リユカは自分から何かを主張することのない子、として通してきたから無理もない。

「どうした、ラファラン」

「街で病が流行りつつあります。どうやら何年か前、北方で流行ったものようです」

何が起きたのかと訝しむラファランに、誰から聞いたのか、いつ聞いたのかなどの情報は一切入れず、簡潔に伝える。ラファランの顔色が変わる。

「すぐ対処する。よく伝えてくれた」

即座にラファランは仕事モードに入った。それ以上リュカに何も聞かず、リュカも何も言わない。その程度には、父子は信頼しあっていた。

その日から、地獄のような日々が始まった。

ラファランもリュカも眠れない日々が続いた。デマを抑え、正しい情報を流すように努め、様々な分野の専門家を交えて話し合いの場を持ち、王国に早馬を出して援助を頼み、どうにかして流行を抑えようとした。

しかし、その努力もむなしく、市民はデマに惑わされ、正しい情報は信じず、専門家の話が理解できない人間が大多数で、王国の援助も焼け石に水だった。

結果、ロークフィード領民の役十人に二人が病で死に、奴隷の多くがデマに惑わされた市民の起こした暴動によって殺され、それを鎮圧するために領兵が投入されるといふ最悪の事態に陥った。

グレーネス家自体は、リュカの初動が良かったのか、それともただ単に幸運だったのか。伯爵家族から、下っ端に至るまで百人を超える人間がいるにも関わらず、犠牲者は一人だけという奇跡的な結

果になった。

ラファランはその死んだ使用人を手厚く葬った。

その使用人は、リュカが一番なついていた使用人だったからだ。

名前を、マイラ・ブラッドと言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702x/>

きっとそれは嘘だから（仮題）

2011年10月30日04時11分発行